

◆ 室生犀星の胃潰瘍とアスピリン ◆

—彼はアスピリンと胃潰瘍の関係を日記に記していた—

元関東中央病院副院長
野村 益世

かつて「緑のひろば」に、私は夏目漱石や寺田寅彦の胃潰瘍につき書かせていただいた。そして、二人の潰瘍大出血は、服用した風邪薬(アスピリン含有の)により誘発されたのであろうと推論した。漱石の『思ひ出す事など』、寅彦の日記の記述からの推理である。漱石夫人は「胃を悪くする前にはよく咽頭を痛める」と書いており(『漱石の思い出』)、寅彦は別の日の日記に「胃の悪化の前には咳がひどくなった」と書いている。つまり二人とも潰瘍出血と感冒様症状との相関を考えたが、風邪薬との関係には気付かなかった。ところが室生犀星はアスピリンと潰瘍症状との相関を日記に明記していた。昭和24年の日記である。その頃の日本の医師のほとんどはアスピリンと潰瘍との関係を知らなかったと思われる。犀星の明確な推理は驚きである。

犀星の病気

生来健康で大病はしていない。若い頃から酒、タバコを嗜んだ。昭和4年(40歳)頃から時々胃痛が起った。昭和6年にも胃薬をのんでいる。

昭和16年12月頃より夕方上腹部鈍痛が起り、なおらず、翌昭和17年4月から約20日間本所の同愛病院に入院、胃潰瘍と診断され加療した(『萩原朔太郎を哭す』など)。昭和19年、20年にも胃症状は出沒した。昭和23年4月以降彼は日記をつけている。昭和24年になると歯痛がしばしば起り治療を受けた。9月1日よりアスピリンを服用したところ歯痛にはよく効いたが、2、3日後から胃重感吐気が起るようになった。9月11日の日記には、アスピリンをのむと胃潰瘍罹患時と同じような症状が起る」と記した。昭和25年、26年にも胃痛は出沒した。昭和27年3月2日の日記には、処方された風邪薬をのんだあとの胃症状を「アスピリンの中毒である」と記した。昭和28年8月に抜歯したがアスピリンをのんだあと胃痛が起った。

昭和29年1月中旬より胃痛が続き、1月22日、日比谷の胃腸病院に入院した。X線検査で大きな胃潰瘍があり、手術をすすめられた。しかし、希望せず、内科治療に努めた。8日後、便潜血反応は陰性化、胃痛は3週間後やっと消失した。2月下旬無理して退院、以後自宅で療養した。4月28日のX線検査では潰瘍はほぼ治っていた。しかしその後も胃痛は出沒した。この頃禁煙しようとしたが出来なかった。翌昭和30年6月のX線検査では潰瘍は再発していた。以後長期に服薬をつづけた。昭和31年6月以降に日記はなく、その後の潰瘍の消長は不明である。最晩年の『われはうたへど やぶれかぶれ』には排尿困難(前立腺肥大?)や咳にひどく苦しんだ記述はあるが、胃については何も書かれていない。落着いていたのであろう。その頃でも咳にむせびながら喫煙していた。彼は昭和37年3月肺癌のために72歳で死亡した。最初の入院時(昭和17年)に禁煙していれば肺癌にならなかったかもしれない。

犀星(本名照道)は明治22年(1889年)金沢市で生まれた。父は元加賀藩の足輕組頭、母はその家の女中であった。生後1週間で養子に出された。養母は酒呑みのアバズレ女で、彼はかなりいじめられたらしい。9歳の時実父が死亡、その葬式直後、実母は家を追われ行方不明になった。

13歳、高等小学校を3年で退学、裁判所の給仕として働きに出された(当時尋常小学校は4年、高等小学校も4年であった)。職場の上司から俳句を教わったのを機に文学に目覚め、俳句や詩を新聞雑誌に投稿するようになった。8年後裁判所を辞め、短期間新聞社に勤めた後、21歳で上京、放浪生活のごとき数年を経て、詩人として認められ、30歳(大正8年)からは小説も書き出した。同じ私生児でも生母に育てられ、一高東大を卒業した高見順と比べれば、彼の半生は悲惨であり、それを乗り越えて大成した生涯は見事である。そして高学歴の漱石や寅彦ですら気付かなかったアスピリンと潰瘍の関係を彼が指摘できたことも驚きである。